

## テーマ展 新収蔵の資料 —受贈・購入作品から—

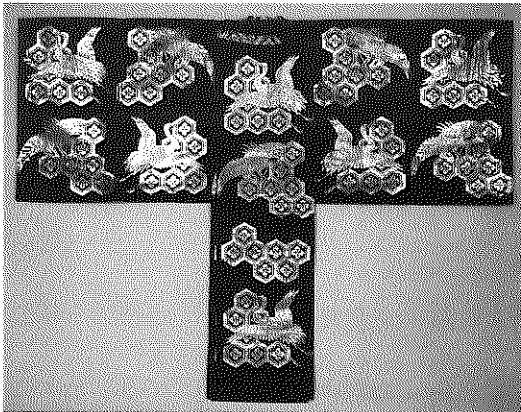
平成20年(2008年)12月4日(木)～12月22日(月) 展示室1

平成13年以降に寄贈を受けた作品と購入作品の中から、彦根藩士家に伝来した甲冑、書画や書状、城下町の古文書など、彦根ゆかりの作品を紹介します。

ギャラリートーク 12月6日(土) 午後2時～ 学芸員 高木文恵

## テーマ展 吉祥のデザイン —鶴と亀—

平成21年(2009年)1月1日(木・祝)～2月3日(火) 展示室1



日本で見られる吉祥文様の多くは中国から伝えられたものですが、その中でも、千秋万歳をあらわす鶴と亀は、日本人が最も身近に感じる文様のひとつと言えるでしょう。

鶴と亀に吉祥の意が込められたのは古く、古代中国の神仙思想において、不老長寿の仙人の住む仙境の島にその姿を見出すことができます。

周りを見渡すと、鶴と亀が単独で表現されることは少なく、松竹梅や旭日、瑞雲など、ほかの吉祥のモチーフとともにあらわされて瑞祥気分に満ちあふれます。

本展では、鶴と亀がデザインされた江戸時代を中心とする美術工芸品を紹介し、先人の吉祥に対する思いを胸に新春を寿ぎます。

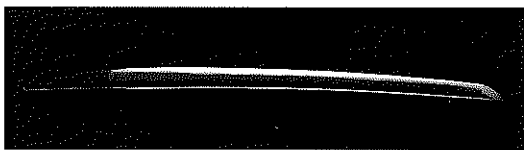
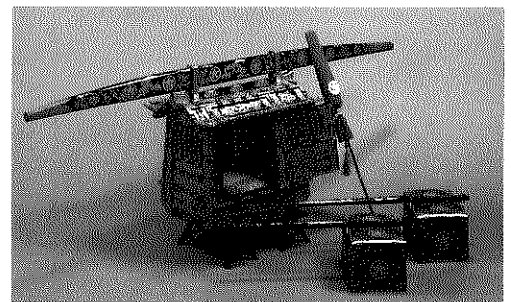
ギャラリートーク 1月10日(土) 午後2時～ 学芸員 高木文恵

## シリーズ「直弼発見！」巻の5 弥千代の雛と婚礼調度

平成21年(2009年)2月6日(金)～3月10日(火) 展示室1

雛祭りのシーズンは、毎年恒例、井伊直弼の二女・弥千代の雛道具の一挙公開を行います。今年度は「井伊直弼と開国150年祭」にちなみ、弥千代が高松松平家に嫁ぐ際に持参した、雛道具85件と現存する婚礼調度をあわせて展示します。実寸の調度とミニチュアの雛道具—華やかで繊細な婚礼道具の数々をご覧ください。

ギャラリートーク 2月7日(土) 午後2時～ 学芸員 小井川理



## シリーズ「直弼発見！」巻の6 井伊直弼の甲冑と刀剣

平成21年(2009年)3月13日(金)～4月14日(火) 展示室1

井伊直弼が藩主に就任した際に新調した「赤備え」の甲冑、指料と大小拵、青年時代から続けていた居合の鍛錬に用いた刀などを紹介します。

ギャラリートーク 3月14日(土) 午後2時～ 学芸員 坪内広子

## 能面の切型きりがた



展示室で、「これ、ほんものですか？」という質問を受けます。日本の博物館の常設展示では、レプリカ（複製）を主体に展示を構成していることが多いので、こうした質問が出てくるのも無理からぬところです。

展示品としてのレプリカ制作技術は、めざましい発展をとげています。立体作品のレプリカを作ろうとすると、一般的には、実物から型どりをして、樹脂で寸部違わぬ製品を作り、実物に限りなく近い彩色を施します。また、見た目だけではなく、材質や技法までも同じに作ったレプリカもあります。

こうした複製制作の試みは近代になって始まったのでしょうか。文禄2年（1593）、豊臣秀吉（1537～1598）が、佐賀県の名護屋城に滞在していたとき、金春・観世の両太夫が下向、携えていた名物の面に目を付けた秀吉は、“写し”を作らせようと企てます。さすがに取り上げることはできなかったのでしょう。

そこで呼び寄せられたのは、「面などをうつし侍りて、類なき名人」、京都の醍醐にいた角坊という面打でした。できあがった模面は、「御一覧あるに、何れが本、何れが写し共見え分ざる」できばえだったとあります。角坊はこの功により、銀五十枚を与えられ、天下一の称号を許されました（『太閤記』）。

現代人の感覚と違って、写しにも、それなりの価値が認められていたのです。江戸時代になると、しかるべき能面（本面）の模作を作ることが盛んに行われるようになりました。能が幕府の式楽となり、能の家が幕府の御抱えとなって、演目が定められたことにより、能面の形がほぼ固定したことがその理由のひとつに上げられるでしょう。また、諸大名が幕府にならい、能に力を入れたことにより需要が増加したという事情もあったかもしれません。こうした事態に対応する技術的な工夫のひとつが「切型」でした。

切型とは、能面の縦横の断面を型に採ったものです。面を打つとき、この切型を当てて、彫り進んでいきます。微妙なニュアンスまでは無理としても、形のあらかたは写すことができるはずです。絵師の模本と同じように、切型は面打家の財産でした。もっとも、これに類したものは、例えば、擬宝珠などの建造物の飾り、梵鐘、茶の湯の道具などにもみられます。型板または型木と称していました。

能面の切型の現存例はほとんど知られておらず、佐賀の鹿島鍋島藩に伝わった「能面切型図」（祐徳稲荷神社）が報告されている程度です。能面の実物大の正面図と側面図、そして断面図を描いた卷子本で、彩色や彫法に関する指示が書き込まれています。

しかしこれは、あくまで紙に書いた原図ともいえるべきものでした。ところが、井伊家伝来資料のなかに、

ヒノキ材の薄板を切り抜いた切型の実物があるのです。面の中央を縦に通る断面1本と、これと直角に交わる横八本の断面、頭頂部や目などの部分からなり、墨書があつて名称のわかるものもあります。「邯鄲男、是閑打」

「本面童子」「童子、友閑打」「増、近江打」「十六、近江打」「姥」と、この他に名称不明の1種を加えた合計7種です。また薄板や厚紙に描いた切型図もあり、こちらは「大癒見」「本面泥眼」（以上ヒノキ材）、「名称不明」（厚紙）の3種を数えます。宗家伝来の本面がある一方で、面打では、是閑（？～1616）、友閑（？～1652）、近江（児玉満昌、？～1704）が見えます。

記された墨書の筆跡から見ると、江戸時代のものだと判断されます。大正6年（1917）の井伊家の資料台帳に「面雛形」とあるのが、これにあたるのでしょうか、残念ながら、どのような経緯で井伊家に入ったのかはわかっていません。現存する井伊家伝来の能関係資料の多くは、大正12年（1923）の関東大震災以降の収集品で、東京に置かれていたものなので、これらの切型は、江戸時代には井伊家に入り、彦根に保管されていたと考えるのが自然です。

内容には精粗があり、本面童子と友閑打童子が同一作者の手になると見られる他は、一連の資料というわけではなさそうです。また、一部に墨痕があることから、断面部に墨を塗って乾かないうちに制作途中の面に押し当てて、形を確認しながら彫り進んでいったようです。

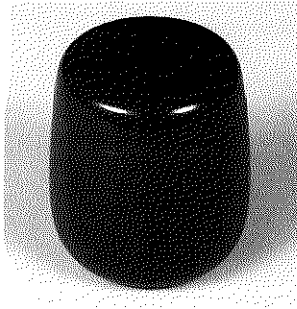
切型という用途の限られた道具が大家にあるということは、何か特別の理由がなければなりません。注意すべきは、名称不明の一具です。墨線に沿って切り取っただけの作りかけの状態で、墨書もありません。他に較べて少し厚く、つくりもやや粗雑な感があります。どちらかというところ専門の面打の作とは言えないように思います。

誰が作ったのか。想像を逞しくして、歴代当主のなかの誰かが面を打とうとしたとすると、現代のアマチュアによる能面制作ブームの先駆けと言うことになります。しかし残念ながら、現在のところ資料は見つけられないでいます。

（齋藤 望）

ちやうるしぬりまつかさなつめ  
茶漆塗松笠棗

棗は、茶の湯の席で抹茶を入れる容器です。器の形状が果物のナツメに似ていることから「棗」と呼ばれました。写真の棗は、底の方が膨らんだ松笠に似た形で、茶漆を塗っています。蓋裏には朱漆で「石州形」という文字と井伊直弼の花押を記し、武家茶道を主導した片桐石州の好み形として、直弼が作らせたものとなります。



▲蓋裏の字形

◀茶漆塗松笠棗

この棗は、直弼が、安政4年(1857)正月15日の夕べ、彦根城表御殿(現在の彦根城博物館)不待庵で行った茶会に用いたものと考えられています。亭主は直弼、客は柏原与兵衛(側役)、宇津木六之丞(側役)、田中憚庵(奥医師)の3名。この日は、茶会の始まった頃から雪となり、日が傾いて次第に暗くなる席中には懸燈台で明かりを灯しました。不待庵は、表御殿の庭園の東隅に御殿とは別棟としてあった茶室です。雪中の暮れ時、しんとした静けさの茶室に、茶漆が彩りを添えたことでしょう。

直弼は、翌安政5年(1858)正月13日に江戸屋敷で行われた正午の茶会にもこの棗を用いており、新春にふさわしい茶器と考えていたのかもしれませんが。

本作品は、特集コーナー「直弼のころ」(展示室5)にて、平成20年(2008年)12月23日～2月2日に展示します(12月25日～31日は休館)。

## 教育普及活動のひとこま 平成20年度「はくぶつかんへ行こうスペシャル」

夏休み恒例、小学生対象の体験教室「はくぶつかんへ行こうスペシャル」を8月3日(日)、4日(月)の2日間で行いました。今年は、教科書やノートで身近な紙のいろいろな特色に注目しました。

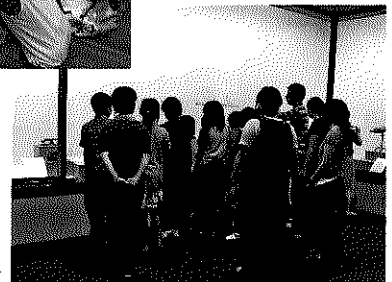
紙漉き体験では、参加者一人一人がはがきを作りました。水に溶かした原料を型枠に流し入れ、水分をとって乾燥させると、厚手のはがきが出来上がります。色紙で模様をつけた自分だけのデザインにも挑戦しました。

紙の種類を体験するメニューでは、ふだん見慣れた洋紙と習字用の和紙で、鉛筆、ボールペン、毛筆それぞれの書き心地を比べたり、破った時の様子を観察しました。紙素材で作られたものを当てる2択クイズも好評でした。

最後は、展示室で昔の紙を見学。古文書や冊子、卷子に用いられた江戸時代の紙の質感や、書かれた文字の様子を観察しました。古文書の虫喰い穴にも注目し、紙のいろいろな表情を学びました。



◀紙漉体験の様子



展示室見学の様子▶

教室の企画運営には、職員とともに、博物館学芸員実習中の大学生が携わりました。元気いっぱいの小学生の思いも寄らぬ反応に苦労しながらも、2日間の教室を、楽しく、安全に、盛り上げてくれました。

## 調査研究活動のいま

## 彦根藩資料調査研究会で大名道具の調査研究を始めました

当館では、彦根藩主井伊家伝来の資料を中心とする彦根藩資料の調査研究を進めるため、平成7年から19年まで彦根藩資料調査研究委員会を組織し、博物館外部の歴史研究者と共同研究を行いました。その成果は、『彦根城博物館叢書』全7巻となって結実し、彦根藩の政治や武家の生活文化に関する新たな歴史像を広く紹介することができました。

とはいえ、歴史の宝庫である彦根藩資料全体から見れば、調査研究はまだ入り口にたどり着いたばかりです。多くの美術作品や古文書たちが無限の可能性を秘めて、あらたな作品の価値や歴史事実が解明されるこ

とを待っています。

そこで、当館では、今年度から3年間、大名道具に関する基礎研究をテーマとする第2期の調査研究を開始しました。9月21日には、第1回彦根藩資料調査研究会を開催し、熊倉功夫氏をはじめ歴史・美術史研究の第一線の研究者を研究委員に迎え、今後の研究計画を話し合いました。大名道具研究は実は未開拓な研究領域で、かつ美術作品と文献の双方が豊富に伝わった彦根藩資料ならではの分野です。当館では、調査研究により、江戸時代の大名生活の新たな実像を明らかにすることを目指します。研究成果をご期待ください。

## スケジュール

12月	1月	2月	3月
<b>6土</b> ギャラリートーク 「新収蔵の資料 —受贈・購入作品から—」  <b>13土</b> 古文書のみかた(中級)③  <b>25木~31水</b> 休館 新年は1月1日から開館します  <b>テーマ展</b> 「新収蔵の資料 —受贈・購入作品から—」 12/4 木~12/22 月  <b>展示</b> “ほんもの”との出会い ◎「直弼のこころ」	<b>10土</b> ギャラリートーク 「吉祥のデザイン—鶴と亀—」  <b>17土</b> 古文書のみかた(中級)④  <b>テーマ展</b> 「吉祥のデザイン —鶴と亀—」 1/1 木~2/3 火  <b>展示</b> “ほんもの”との出会い —井伊家伝来の名宝 80 点あまりを展示— ◎特集コーナー「直弼のこころ」	<b>7土</b> ギャラリートーク 「弥千代の雛と婚礼調度」  <b>14土</b> 古文書のみかた(中級)⑤  <b>シリーズ「直弼発見！」巻の5</b> 「弥千代の雛と婚礼調度」 2/6 金~3/10 火	<b>7土</b> 古文書のみかた(中級)⑥  <b>14土</b> ギャラリートーク 「井伊直弼の甲冑と刀剣」  <b>シリーズ「直弼発見！」巻の6</b> 「井伊直弼の甲冑と刀剣」 3/13 金~4/14 火

※1ヵ月ごとに展示替えがあります

## 井伊直弼と開国150年祭

### 常設展示室特集コーナー「直弼のこころ」



彦根藩主井伊直弼(1815~60)は、幕末の大老として、つまり政治家としてその名が広く知られていますが、諸芸に励む文化人でもあったことを知る人は多くないでしょう。

直弼は、禅や茶の湯、生け花、国学、和歌、画、居合、槍、兵学など、実に幅広く学びました。どの分野も、手すさび程度のものでなく、免許状

を得て一派を開くまでに奥義を究めようとする真摯な姿勢で取り組んでいます。最近の研究では、精神性を重視した茶の湯の活動がつまびらかになり、当時を代表する大名茶人として高く評価されるに至りました。

当館では、本年6月に開幕した「井伊直弼と開国150年祭」に合わせ、「直弼のこころ」を新設しました。ここでは、直弼の文化的な側面にスポットを当てた作品を順次紹介しています。

自筆の書状や手作りの作品、遺愛の品などから、直弼の息づかいを身近に感じていただくことができます。是非ご覧ください。

## あなたも！ひこね応援団

### あなたの善意を活力に。ふるさと彦根応援寄附制度

生まれ育った故郷「彦根」、思い出のまち「彦根」。そんな彦根への思いを「ふるさと納税」のしくみで寄附していただき、彦根の魅力を高め発展させるための事業に活用する制度が始まりました。

寄附金額は1口5,000円から。文化財や歴史を後世に受け継ぐ「ふるさと納税の誇り保存整備事業」のほか、教育、福祉、国際交流、ひこにゃん、まちづくりなど、6つの事業の中から、みなさんの思いに最も近い事業をお選びいただくことができます。

博物館でも、受付カウンターに申込書を設置し、寄附のお申し込みを受け付けています。寄附をいただいたご本人には、彦根城、玄宮園、彦根城博物館、夢京橋あかり館の4施設に、何回でもご入場いただける「ふるさと彦根たっぷり満喫！年間パスポート」(寄附日から1年間有効)をお贈りします。

彦根の魅力を未来につなぐ寄附制度にご支援をお願いします。

### お問い合わせ先:

〔寄附制度の内容について〕

彦根市役所まちづくり推進室 Tel 0749-30-6117

〔博物館での寄附受付について〕

彦根城博物館 Tel 0749-22-6100

※彦根市役所のホームページ (<http://www.city.hikone.shiga.jp/>)でもご覧いただけます。